

2014年4月2日

学長 尾池和夫

2014年4月 新規採用職員の皆さんへ

学校法人瓜生山学園の職員になられた皆さん、何はともあれ、ご就職おめでとうございます。この学園に、こころから歓迎します。私も1年前に新規採用されたばかりですから、あまり先輩の顔はできません。

今年も、高原学舎の近くの染井吉野が、今ちょうど満開です。新入生と、皆さんの就職を祝うように満開になりました。

皆さんは「京都文藝復興」の理念を理解して、このキャンパスを職場として選びました。この瓜生山学園のキャンパスには『藝術立国之碑』が立っています。その碑の言葉には、

「宇宙の神秘に平伏せ 地球の偉大さに畏れを抱け 生きとし生ける命を愛し尊べ」

とあります。徳山詳直理事長の言葉です。文明哲学研究所が主催して、今、上終町の交差点から瓜生館に入ったところで、5月31日まで、「愚行展 「核」—無知・隠ぺい・無関心」という展示が行われています。核燃料物質のない世界を、芸術の力で実現することが、この研究所の究極の目標です。

皆さんが参加する職場には、教学、総務、入試、施設、図書、広報、通信教育などなど、さまざまな場がありますが、とにもかくにも、さまざまな場所をよく見て廻ってください。多くの発見があります。

今、恒例の「春の顔見世展」が行われています。本学の教員たちが学科ごとに交代でご自身の作品を展示するものです。今年は美術工芸学科の担当ですから、またとない豪華な展覧会になっています。椿昇学科長の「美術工芸学科 春の顔見世展によせて」をまずしっかりと読んで下さい。そこには、椿さんの思いが率直に書かれています。

作品群には圧倒されます。竹内万里子さんの「沖縄の洞窟「ガマ」 その闇の奥へ」、

やなぎ みわさん、「ゼロ・アワー 東京ローズ 最後のテープ」、これは来年1月からニューヨークをはじめとする6都市での上演が決まっています、その出演者を募集しているものです。奥村美佳さんの「道」、青木芳昭さん「折尺の花」、清水六兵衛さんのめったに見られない作品群などなど、ゆっくり時間をとって、見てください。

環境デザイン学科の坂茂教授が、米国・プリツカー賞（The Pritzker Architecture Prize）の2014年の受賞者に決定しました。その坂先生の紙管の建造物があるものぜひ見てください。また、その前には、新しい六角堂があり、その中に昨日、教職員総会で理事長が話した仏像が安置されています。

情報デザイン学科卒業生、森田修平さんの作品『九十九（つくも）』が、第86回米国アカデミー賞短編アニメーション部門にノミネートされました。

第64回ベルリン国際映画祭で、本学映画学科出身の黒木華（くろき・はる）さんが、出演した山田洋次監督の映画「小さいうち」で、銀熊（SilbernerBar）賞の最優秀女優賞を受賞しました。

大学で最も大切なのは、もちろん学生です。それを意識していただければ、問題はないと思います。基本は、学生に親切な職員であるということに尽きます。

心身の健康が何よりも大切です。行き詰まったときには一人で悩まず、かならず誰かに声をかけてください。解決の糸口が、職場の他の人の言葉から見えてきます。

こころと体の健康に気をつけて、バランスのとれた食事を取り、睡眠をこころがけて、体と脳を最大限に活動させて、ご活躍くださるよう願っています。

どうかよろしくお願ひします。

尾池和夫